



収蔵庫改修中

博物館には、資料の収集・保管を行うという大きな使命があります。収集した資料を調査研究、展示などの機会を通じてその成果を社会に還元するのはもちろんのこと、収集資料を適切な環境で長期にわたり保管することが求められます。

本県初の総合博物館として昭和48(1973)年にオープンした県立郷土館は、今年で開館44年となりました。この間、多くの県民の皆様から寄贈していただいた郷土資料を中心とする収蔵資料は、約10万点にのぼります。県民の共有財産とも言うべきこれらの資料は、館内に10室ある収蔵庫で保管しています。このうち空調設備を備えた8室について、設備の経年劣化が見られていたことから、平成30(2018)年3月まで長期休館として改修を進めています。

改修は主に収蔵庫内での作業となるため、工事に当たり収蔵庫内の全ての資料を庫外へ退避させる必要があります。空調管理された資料の退避先としては、やはり空調管理可能な場所が最適ということで、館内の常設展示室を退避場所としました。このため、9月からの工事開始に先立ち、7月下旬から2~3階の常設展示室を「部分休館」として資料の移動作業を始めました。1階で特別展のみの営業としたこの期間は、折しも夏祭りや帰省シーズンと重なる時期でもあり、せっかく来館したのに常設展示を観覧できなかったという声もいただきました。展示を楽しみにされていた皆様には、改めておわび申し上げます。

この部分休館の期間、館内では多くの職員が夏

休み返上で資料の移動作業に明け暮れました。そして特別展閉幕後の9月1日、館内での工事が本格的に開始されました。この工事も10月末には終了し、現在は、新しい機械や資材からの放出が避けられない化学物質の室内濃度を低減させるための「枯らし」と呼ばれる工程にあります。枯らしの期間は、休館期間が少しでも短縮できるよう考慮し、合理的な範囲で最も短い「3か月」という選択をしました。平成30年1月末までの枯らし期間を経過後、改めて庫内の環境を調査した上で、平成30年4月1日の営業再開に向けて資料を収蔵庫へ戻す作業を行うこととしています。

無事に全資料を収蔵庫内に戻せるだろうか。そういった不安を少なからず感じながらも、今日も館内では学芸員らが、展示室いっぱいに広げられている10万点の資料の確認・整理事業を行っています。

お知らせ

青森県立郷土館は、館内収蔵庫の改修工事のため

平成30年3月31日(土)まで 全館休館

とさせていただきます、平成30年4月1日(日)の営業再開を予定しております。

展示を楽しみにされているお客様にはご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

今回の改修工事は主に収蔵庫内の空調設備を更新するというものですが、このほか、収蔵庫（室そのもの）の気密・断熱・調湿性能を向上させる改修も同時に行いました。日常的には空調が庫内の温度と相対湿度を制御しますが、空調は電源供給が必須であり、例えば災害などで長期停電となった場合、適切な温湿度を維持することが困難になります。そこで、外気の影響を受けやすい建物の外周に接する面には断熱材を入れ、その上に調湿機能のある内装材を貼り付け、扉は気密性の高いものに交換しました。これによって、万が一の際にもある程度は庫内環境を維持できるようになったと考えています。

また、収蔵庫の環境としては、温湿度のほかにガス状物質にも注意が求められます。有機酸やアンモニアは、人体に影響しないような低濃度であっても、資料に変色や錆を生じさせることが知られているからです。そのため、今回の工事に用いた全ての資材は、化学物質の放出がないか、あってもできるだけ少ないものとししました。これは、博物館収蔵庫仕様の資材の選択手法が必ずしも確立されていない現状の中、資料保存担当学芸員や施工業者と検討を繰り返して進めました。

このように、収蔵庫としての環境安定性を最重視し、塗料や接着剤の使用がなるべく少なくなるよう考慮したため、仕上がりの見た目には若干の

物足りなさを感じる部位も皆無ではありません。もし収蔵庫をご覧になる機会があり、そして美観を損なっていると感じる箇所があったならば、それこそが、新築でも大規模改修でもない、部分的な改修の場合の「博物館としての最適解」を求めた結果なのだと感じていただければ幸いです。

ところで、収蔵庫から退避させた資料を整理し、資料台帳と照合する作業の過程では、思いがけないモノも見つかっています。それらの資料としての評価は今後の調査研究が待たれますが、いずれにしても、収蔵庫内の全資料の移動という開館以来初の経験を経て、開館に先立つこと3年前から開始された県立郷土館の資料収集活動の「全貌」が明らかになったと言えます。約半世紀の間、当館に様々な立場で関係してこられた全ての先人たちに思いをはせながら、この貴重なコレクションをしっかりと守り、次代へ受け継いでいくという覚悟を、今回の改修を通じて全館員が改めて抱いたところです。

残念ながら収蔵庫は観覧者が立ち入りできないバックヤードに位置しているため、なかなかお見せすることはできませんが、いつの日かバックヤードツアーなどの形で、この館史的な改修の成果をお伝えできる機会があればと願う次第です。

(総務課副課長 小林浩一)

日々、根気のいる作業 ～ 考古分野 ～

考古分野には県民からの寄附資料のほか、当館で発掘調査した資料も多数あります。発掘調査は、博物館の調査研究事業の一環で、青森県の先史時代を解明するため、学芸員が調査内容と発掘場所を決めて行った学術調査です。開館時から平成14年までの間、県内22遺跡を調査しました。その成果は報告書や当館年報等で公表していますが、大半は未報告資料です。調査資料は、遺跡毎で保管されていましたが、報告書掲載ページ単位で箱や袋にまとめられているものが多く、資料一つ一つに個別番号を付ける作業が残っていました。

現在、考古分野ではこれらの再整理を行っています。報告書に掲載されている土器・石器等の実物を確認し、1点1点に新たに番号を付けます。番号を付した資料を箱に収納する際は、後で検索しやすいように工夫をしています。

この作業を手伝っている解説員は、展示室にある復元された土器は見慣れています。初めて目にする報告書と遺物の照合には戸惑っていました。日を追うごとに報告書と資料の見方がわかり観察する目が養われると、資料を判別することに楽しさを感じることもあるようです。

しかし、この作業、報告書の通りに見つかるとは限りません。壊れて複数の破片になっていたり、別の箱に入っていることもあり、なかなか思うように進みません。この根気のいる作業を解説員は毎日着々と進めています。

この再整理により、未報告資料の中にも展示や

調査研究に活用できる貴重な資料も見つかっています。これらをいずれ公開していきたいと考えています。

(主任学芸主査 杉野森淳子)



報告書の図・写真・表と資料とを
1点1点確認中



壊れる前の状況を写真で確認しながら
土器を再復元

資料整理の賜物、思い出の写真再発見 ～ 歴史分野 ～

歴史分野では、休館期間を利用して資料の点検・整理等を行っています。収蔵庫内の資料を展示室等に運び出して状態等を確認し、必要に応じて目録と照合しています。また、将来もより良い状態で資料を保存していくため、資料を清掃しています。これらの作業には、通常開館中は展示室で解説業務を担当している解説員もあたっています。

このような作業のなかで、再発見される資料もあります。一例として、約40年前に寄贈された野球の試合（写真1）とその観客（写真2）を撮影した写真資料を取り上げます。それらを含む一群の資料の中には、「佃グラウンド（グラウンド）」と書かれた封筒が含まれていました。佃グラウンドは、おおよそ現在の青森市佃二丁目にあたる場所にあります。大正期の青森市内でも野球は盛んに行われていたようです。もちろん、佃グラウンドもそうした試合の会場になりました。

今回掲載した写真は、前述の佃グラウンドで昭和戦前期に撮影されたもので、朝日新聞社の旗があることから全国中等学校優勝野球大会（現在の夏の甲子園）の予選で撮影されたものとみられます。当時の試合は選手や観客の思い出となったことでしょう。

これらの資料を含め、私たちは当館所蔵の資料を、県民の記憶・財産として末永く守っていくため、今後も励んでいきたいと思えます。

※写真の撮影場所特定にご協力いただきました、青森市民図書館歴史資料室の方々に対しまして、感謝を申し上げます。

（主任学芸主査 佐藤良宣）

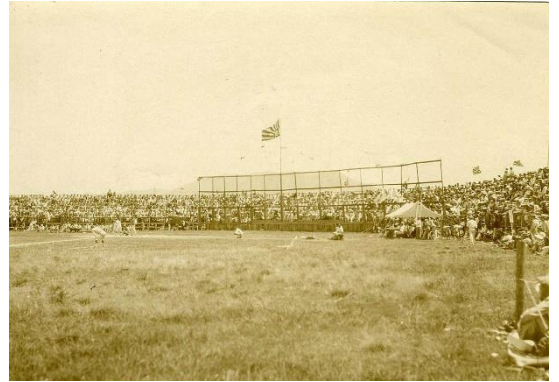


写真1
（観客で埋め尽くされる佃グラウンド）



写真2（野球の観戦をする人々）

防災の日、万が一に備えて ～ 防災訓練 ～

毎年9月1日は「防災の日」とされております。郷土館では9月8日、この防災の日になんだ防災訓練を行いました。防災の専門家を講師に招き、実際に火災が発生したことを想定して、お客様の避難誘導手順の確認、消火器での消火訓練、防火シャッターなどの設備の動作確認を行いました。この日は避難誘導を素早く行うことができ、講師の方からも高評価をいただきました。

また、9月29日にはAED（自動体外式除細動器）の実技講習会が行われ、基本的な心肺蘇生法やAEDの操作方法を身につけるため、青森地域広域事務組合中央消防署の消防士に講師を務めていただきました。

倒れている人を発見したら、呼びかけなどを行い反応や呼吸を確かめ、「普段通りの呼吸ではない」と判断したら直ちに胸骨圧迫による心肺蘇生法を開始、AEDが届いたら電源を入れ、音声ガイドに従って操作をする――

一連の流れを一人ずつ実際に行うことで、緊急

時の適切な行動を学びました。

郷土館の営業再開後も安心してお客様にご観覧いただけるよう、これからも定期的な訓練を行っていきます。

（指定管理者TTHAグループ 櫻庭友輔）



AED講習で緊急時の行動を学ぶ

交通の要所、今昔巡り ～ あおもり街かど探偵団 ～

9月30日（土）、一般の方々と街の歴史などに触れる街歩き企画「あおもり街かど探偵団」を実施しました。当日は朝から豪雨だったためか、予定よりも少ない9名の方の参加となりましたが、出発時には雨も止み、晴天のもとで最後まで巡り歩くことができました。

今年は昨年までの青森市中心街を歩くコースとは異なり、青森市の堤橋周辺の栄町や茶屋町、堤町を巡るコースを設定しました。この地域は藩政期には町域の東端に位置する一方で、交通の要所としての性格をもち、近代以降は早くから市街地化されて賑わいをみせたという特徴があります。

まず出発地点の諏訪神社では、宮司の柿崎さんに神社の由来などを教えていただきました。続いて、堤橋周辺地域の変遷などを紹介したあと、堤川沿いの松木満史アトリエ跡、文芸のこみちや郡場寛生家跡を巡って青森にゆかりの深い著名な先人たちについて触れました。コースの後半では、地図や写真を参考にしながら、国道沿いに発展した栄町、奥州街道を往来する人々で賑わった茶屋町、交通の要所や商店街として栄えた堤町界隈を巡りました。最後は、かつて青森県立青森高等女学校などの学校が立ち並んだリンクステーションホール青森（青森市文化会館）周辺を歩いて終了しました。

街歩きの最中には参加者の方から思い出話なども披露され、他の方々も聞き入っておられました。また、「なじみの場所の知らないことを知ることができた」、「中心街とは違ってあまり触れられることのない地域を見てまわることができて、有意義な時間を過ごせた」などの感想をいただきました。

（研究主査 滝本敦）



松木満史アトリエ跡より堤橋方面



茶屋町延命地藏尊

郷土館のブログがはじまりました♪

郷土館では今年8月より指定管理者TTHAグループによるブログ「Weeklyきょうどかん」を公開しております。休館中の工事の様子や、各分野の資料整理作業などを週1回の更新ペースで紹介しているほか、展示室では展示していない貴重な資料の紹介もしております。

11月には当ブログで紹介した“郷土館音頭”がNHK青森の「あっぷるワイド」の特集枠で放送され話題となりました。

一般の方にはあまり知られていない、郷土館の裏側が気になる方、ぜひ「Weeklyきょうどかん」をご覧ください。

（指定管理者TTHAグループ 櫻庭友輔）



NHKあっぷるワイドで郷土館音頭が紹介されました

Weeklyきょうどかん

検索

